

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます
No20 2008.11.15

第三号(24年7月号)から

『陽気』は、昭和24年5月の創刊、平成21年に60年を迎えます。その足跡の一端を、昔の記事から振り返っていきます。



柏木庫治について

(筆者・中澤隼人)

有名な美しい茶道の師匠が「柏木先生はおいくつですか」と筆者に年を聞かれた。これまで彼の年を聞かれたことは何百回か分らない。

そこでいくつくらいに見えますかと反問すると「サア」と娘が嬉しい贈物の中味でも当てるような顔を筆者に向けながら「四十六かな、それとも五でしようか」と言う。こうけ



たが違い過ぎてくると、モウ真面目に違いますというのも馬鹿くさくなつて「まずそんなところでしよう」といわざるを得ないほど若く見られる男である。(註 当時61歳)

教祖が常に周囲の高弟達を顧みられて「この道は、わたしはもう年を取ったと言うこと

だ東京で家主に家賃の請求を迫られながら単独布教をしてきた時、当時の支庁長春野喜市傘下に、今はすっかり隠退している佐津川準を中心に、管下の俊英を集めて、同人として教報「教の友」新聞を発刊する最初の顔合わせが牛込の肉屋で催された。

集まった同人は一府四県管下における新人として、何れも隆盛な教会の御曹司連中で、互いに知り合った仲であったが、一枚加わっている一単独布教師柏木の名は、その名前すら誰も知らなかった。

会議半ばに女中に案内されて入ってきた色の真黒な、見るからに貧弱な男が、春野庁長と共に、日大の講師に出ていた白鳥にだけ声をかけただけで空席になっていた上座にいきなりあぐらをかいて、紹介が済むなり大きな声で一人で笑って一人でしゃべり出した。やがて発刊方針がきまつて、肉が煮られ盃に酒が注がれたかと思うと、真先に下手な唄を歌い出し、歌い終わるとパチパチ手を叩いて自分の唄に自分で拍手を贈り、歌いたいだけ歌ってしまうと、これからお助けに行く家があるからとサツサと帰ってしまった、この男こそ現参議院議員で、部下十四方所を持ち、戦後東京で一番大きな教堂を建築した、東中央分教会長柏木庫治その人である。

現以来本教の信仰に明朗性を加えたことは、陽気暮らしを説いた教祖の理想の旗印を、はつきり高く掲げたことになり、一時は彼の出現は、本教に与えた効より失うもの大なりとの言を為す者もないではなかったが、何といても教理に明るさを加えたことは、本教の歴史に大書して良いことと思う、とにかく彼は傲慢なりとの評を受ける。彼は自ら一日静かに反省してみたが、どう反省してみても柏木程善い男はないとの結論を得た等と、平気で放言するので、その席上に居合わせた者等は、彼の少しも邪念のない道心が有りのままびつたり感じられるのだが、その場の空気に触れぬ者には鼻持ちならぬ傲慢さと感じられるだろう。

彼の単独布教当初から彼の教会に所属して、つくしてきていた一信者が、その後事業に失敗して、彼の教会から離れ再起を目して大陸に渡ってしまったが、彼はその信者の落ち着き先を秘かに調べて、その後数年間匿名で生活費を送っていた事実は、筆者の外誰も知らない。(後略)

これは、「金米糖」にまつわる話である。

この本の筆者は昭和二十九年八月五日、今の茨城県日立市多賀町に田中のぶさん（数え七十九歳）を訪ねている。

のぶさんは明治九年大阪府中河内郡（現在の八尾市山本）生まれ。明治十五年七歳のときに、母親が、頭の血が熱で腐って五、六分（一・五センチくらい）もあるようなうじ虫がたくさんわいて、三人の医者に見放された。そのとき、

知人から「大和の庄屋敷の神さん」の話聞いた父親は明るる日、暗いうちから八里の道を庄屋敷をめざした。

「（父が）お屋敷に着きますと教祖は、『よう帰っておいでた』と大層お喜び下さいまして、『さあさあ、神は必ずたすけするで』とおっしゃいまして、紙に金米糖の三粒包んだのを下さいました——お側の方からかしもの・かりもの、八つのほこりなどの話を聞かせてもらった父親は、一目散にわが家へと急いだ。

「家に帰った父は、『神さんはのう、必ずたすけるとお

つしゃって下さったのじゃ、さあこれを頂け』と言って、私の母に金米糖を包んだのを出して頂かせました。

するとどうでしょう。金米糖を一粒頂くが早いか、母の熱は夢みたようにさらっとひいてしまいました——そして、さつきまで何も食べなかつた母親が粥を食べたと言いつい出し、おかわりまでした。たいへんな苦しい身上が、夢をみたように鮮やかにご守護いただいたのだという。

不思議なご守護から問なしのこと、両親は三人の子どもを連れてお屋敷へ帰った。

「教祖は十畳の間の南側のお窓を背に、一寸高台に赤衣を召して赤いお座蒲団にここにことして座っておいでになりました。教祖は私の母に向われまして、『よかつたよかつた、よう帰ってきた』ととてもお喜び下さいまして、その時、教祖はお手ずから私に金米糖を下さいました。

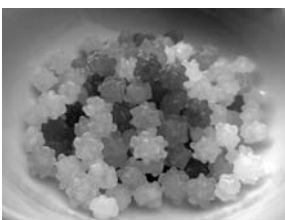
教祖はにこにこなされて、『こっちへおいで。金米糖をあげよう。ここは生れ里（ざとう）やよつてになあ』とおつしゃいました。私は子供で

もあり田舎者と来ていまして、行儀も何も知らずに左の方の片手を差し出しますと、『こつちもお出し』とおつしゃつて、御みずから私の右手を引っぱって下さって、金米糖を私の両手にこぼれるくらい沢山下さいました。私はあの時の子供心の嬉しさは今でも忘れられません——

昔の数え歌に、「いろはに金米糖、金米糖は甘い、甘い砂糖、砂糖は白い……」などと歌われていたように、金米糖は子どもにとって最高のおやつだったに違いない。その金米糖を、子どもの手を引き寄せて両手一杯にのせられ、

「ざとう・砂糖」と茶目つ氣たつぷりにおつしゃた、そのとき教祖八十五歳。そのお姿を胸に浮かべると、フワツと全身が温かくなった。

（抜粋・参考 『教祖の御姿を偲ぶ 改訂新版』 上村福太郎著）



金平糖（金米糖）は、氷砂糖を水に溶かして煮詰め、小麦粉を加えたものに、炒った芥子（ケン）や胡麻などを種に入れ、かき回しながら加熱して作る。

……今秋、初スポーツに挑戦することができた。長年したいと思っていたラフティング。国内で難易度の高い本格的アスレチック。予想以上に楽しめる。その後の運動につながっている。サイクリングやランニング等、軽めの運動だが気分も爽快、こちよい。……友人の大学生になる息子の話。親思いの子で、いつも、いかにして親にお金の心配をかけないでいいかを考えている。バイトをしたり奨学金をもらう段取りをつけたりして、後期の授業料がととのった。そして、大学の会計の窓口で、思わずその息子が言った。「学割、ききませんか？」実話である。

……寒暑の体感温度には個人差がある。「寒いなあ」「なんでもまだ暑いやないか」「暑いなあ」「ちようど涼しいがな」。社内でのふたりのやりとりは激しい。暖房・冷房の入る時期は結局、声の大きい方が決めることになる。ああ、私はもう寒いのに……。

広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか？ 掲載料金は、広告の大きさによって異なります。料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用いただけますよう、お願い申し上げます。
養徳社

原稿募集 読者が作る本

あなただけの“とっておきの話”をお寄せください

ふと思いつくたびに心に小さな灯がともるような話。信仰にまつわる話から日常の何気ない出来事まで、題材は自由です。温かい、小さな灯を読む人の心にも映してほしいのです。

応募資格 ようぼく

応募規定 字数は800字以上1500字以内、ほか。

採用作品は平成21年、『陽気』創刊60年の年に単行本として刊行の予定。締切り 平成20年12月31日

※詳細は、「陽気」11月号の54Pをご覧ください。

『陽気』創刊60年 記念行事と企画

期 間	平成21年1月号より12月号まで
企画行事	創刊60年記念講演会（4月25日） 道柳のつどい（選者を囲んで懇親会・秋予定）
本誌新企画	著名人による天理紀行（随時） 創刊60年記念懸賞小説募集 連載随想『天理今昔物語』（天理大学名誉教授・近江昌司氏） 連載漫画『ひのき家の人々』（金巻とよじ氏） 再録・『陽気』60年（先人のおたすけ話など） 『陽気』と私（随時）
出版企画	新刊本 『お道の人の 心にのこる話』（仮題） 『道の八十年』（松村吉太郎著） 『たすかる名人』（仮題）一柏木庫治おたすけ話・対談